

研究ノート

『水滸伝』の深層心理を探る
— 大衆操作の技法とイデオロギーについての一考察 —

関 下 稔

『水滸伝』の深層心理を探る — 大衆操作の技法とイデオロギーについての考察 —

関 下 稔

(一)

『水滸伝』は私にとって、『三国志』や『西遊記』と並ぶ、懐かしい少年期から青年期に繋がる思い出の中にある。今でもその当時の記憶が時として一部は鮮明に、また一部はおぼろげに蘇ってくる。たとえば、夏休みに外に出ず、室内に閉じこもって『水滸伝』を読みふけたため、秋になって「白っ子」と揶揄されて、恥ずかしい思いをしたこと、武松が「三碗丘を越えず」の立て札を無視して千鳥足で山を越えようとして、案の定恐ろしい虎が出てきたくだりには本当に肝が潰れそうになり、どうなるかと固唾を呑みながら、どきどきしながら夜中に頁を繰ったこと、そしてほのかな光に照らしだされて、まるで影絵のように壁や障子に虎の姿が浮き出たように思われたことなどが、まるで昨日のことのよう思い出される。その当時の生活や部屋の模様や家のたたずまいなどはとうの昔、忘却の彼方に去っていったが、こうした感覚だけは鮮明に残っている。もっともこれらのものを知った順序からいえば、『西遊記』がまずあって、孫悟空や猪八戒の活躍—もっとも活躍するのはもっぱら孫悟空で、猪八戒や沙悟浄はその引き立て役に過ぎないが—の物語を断片的に漫画本や紙芝居で知った。その後、『三国志』を少年少女文学全集で読んで、それから吉川英治本や、さらには原作本を平凡社刊の中国四大奇書で知って、それこそ貪るように読んだ。『水滸伝』はその後で知ることになったが、『三国志』とは違う味わいで、庶民に味方する無法者や反抗者たちアウトローの痛快無比の逸話は、日頃の表面的には秩序だった世界の、その内実の不安定性や可変性、さらにはその両者の間に横たわる深刻な矛盾に疑問を持ち始めた、物心つき始めた年頃のものにとって、大いに溜飲を下げ、してやったりと思わせるものだった。特に魯智深や武松のエピソードは心躍らせるものがあった。もっとも私の印象は最近のゲーム本や劇画、あるいは小説などでの、必要以上にデフォルメされ、どちらかというと、おどろおどろしたトーンとは多少違っていて、これらのものを手に取った後では、決まって果たしてそうだったかなあという思いについつい駆られてしまう。

もっと身近にいる人たちの物語のはずだという思いである。とはいえ、それらはヒーローもの一といっても悪漢やアウトロー達なのだが一という基調の中での多少の感覚上の受け取りかたの違いという程度ではある。それならわざわざ仰々しく自分流の『水滸伝』論を論じるまでもないということになろう。

しかし私がぜひとも論じたいと決意したのは、『水滸伝』の基調そのものへの疑問が浮かんだからである。それは、最初は痛快なアウトローもの、ピカレスク（悪漢）小説として読んだのだが、その基調、とりわけ宋江について、何か煮え切らない、もやもやしたものを感じだし、それが次第に大きな疑問となって、頭の中を駆け巡るようになり、ついにはこれが読まれていく中で果たしている、多くの読者大衆の琴線に触れて心の奥深く浸透し、やがて骨肉化されていくイデオロギー的な役割について、考えさせられるようになったからである。本来の性格が持っていた、大衆の喝采を受けた痛快極まりない物語の基調が、話の進行にともなって次第に現在の秩序の中にきれいに収められたばかりでなく、最後には主人公達が次々と犠牲になる悲劇的な結末に至る過程には正直言ってやりきれない思いがする。しかもその悲劇なるものも、原作者はことさらに悲憤慷慨を煽るが、私には一向に同情が浮かばないものである。とりわけ宋江の最後については、こんなことをしていけば最後は当然こうなるだろうなという醒めた思いと、これ以外に道はなかったのかという疑問と憐憫に強く駆られる。この思いは私の中で長い間沈潜し、鬱積していったが、何かの拍子にこれを宋江の裏切りと変節の物語として読むと、事態は明々白々だということに気付かされた。そうだったのかという思いである。そこで、宋江の美談として描かれている物語をひっくり返して、彼の狡智な陰謀と野望とその果ての自滅の物語として再構築してみたくなった。それは最近の世情とも関係しているかも知れない。正義の味方が実はそうではなかったり、あるいは途中から変節していったりといった物語が最近のアメリカのヒーローものの映画などによくみられる傾向である。たとえば「スターウォーズ」でのダースベーダーの誕生過程や「バットマンビギンズ」や「ダークナイト」での「正義の味方」バットマンの誕生秘話やその屈折した心理の描き方に端的に現れている。それと同様に、以下は美談ものとして語られてきた『水滸伝』のからくりを暴く試みである。もちろんそれに異を抱く正統派の理解が圧倒の多数であることは承知しているが、できれば異端な私説への一瞥と、そして率直なコメントを期待したいものである。

(二)

『水滸伝』は個々のアウトロー達の痛快極まりないエピソードに彩られていて、おそらくは実際にもあったことが、潤色されて民間に伝承されていき、それら断片的なエピソードをもとにして、次第に前後の脈絡を一本の筋に繋げて、一大絵巻物にまとめ上げられたものであろう。

だから本来は何ら脈絡のない断片的なエピソードの寄せ集めだったのだろう。それを赤い糸で結ばれた人間関係として、互いに関連し合った統一的な筋書きにまとめた作者の力量、あるいはそうした脈絡を持たせようと志向した民衆のイメージづくりは大したものである。中でも最初の部分に出てくる魯智深のエピソードと、少し空いて展開される武松のエピソードは際立っている。民間の無頼派の物語である。庶民の味方として、周囲にはびこる小悪を懲らし、不正を正すという物語は、それが日常的に少なからず見られたものだけに、庶民の喝采を浴びたことであろう。男伊達、侠客の成立に繋がるもので、日本での幡随院長兵衛や国定忠治、あるいは清水次郎長などの、強きを挫き弱きを助ける物語と同曲である。しかしその本人達が人生の裏街道を行く、やましい所業の人間であることも確かである。だから大抵は「まともにおてんとうさまを拜めない」とか、「俺たちは所詮真っ当な暮らしはできないやくざもんだ」といった自戒的、自虐的なセリフがついつい口に出るのがきまり文句である。これが『水滸伝』の民間説話の基礎にもある。悪の魅力とでもいうべきであろうか。特に魯智深のハチャメチャな痛快談は明るくて楽しい。本来は提轄（下級軍人）なのだが、正義感が人一倍強く、しかも無類の酒好きときていて、ついつい過剰なまでの正義感に駆られて、悪い奴らに必要な以上の暴力を振るい、暴れ回ることになる。そこで仏門に入って修行してこいということになるのだが、そこでも相変わらず正義の鉄拳を振るうことになる。しかも修行は一向にする気がなく、酒食のし放題で、すっかり厄介者になって持て余され、最後は都の郊外の菜園の監視と管理という閑職に追いやられる。そこで、林沖に出会うという筋書きになる。それについては後で触れることにしよう。

もう一人の武松は酔って前後不覚になりながら、素手で虎を打ち殺すという、まったくあり得ないような豪傑譚がまことしやかに語られていて、それを中心に、奸計にあって殺されたひ弱な兄の復讐を果たす物語—ここで姦夫、姦婦となって敵役になる西門慶と潘金蓮を主役にして独立したのが『金瓶梅』—がその前後に挟まれている。これがあるため、魯智深に比べて武松には悲劇的な感触と誠実な人柄と家族愛が反映されていて、両者は同じ個人的な任侠の世界とはいえ、表裏一体的、正統と異端を表現している。つまり武松の場合はまじめに生きていながら、身内の不幸に出会って、やむを得ず正義の鉄拳をふるうという、極めてオーソドックスな筋書きで、絵に描いたような勧善懲悪ものだが、品行の点では酒に弱いという、いささか破滅的な性格が加味されている。この対照性が同時に両者のエピソードを際立たせてもいる。いずれにせよ、個人的な武勇と任侠の世界である。

次に、政府の役人やそうならうと志したものが、立身出世を目指すという本来の志とは違って、実際には不運や悪質な妨害や奸計にあって、苦境に立たされる物語もかなりある。そのなかでは林沖の物語が白眉である。悲劇のヒーローとしてこれでもかこれでもかとばかりに災難が振りかかってくる。同様のものは、冒頭の九紋龍の史進に棒術を教える王進のエピソードに

もある。清廉潔白な武人タイプの王進が、同僚や上司の妬みによる奸計に嵌って都を追われ、母親を連れて地方に逃れる過程で、立ち寄った先での裕福な地主の厚遇を受け、その恩顧に報いようとして、筋のよいその息子の史進に武術を教えるというくだりである。これは林冲の先駆けをしていて、林冲の物語が後に出てくると、なくてもよかった、いわば二番煎じのようにも見えてくるが、実はそうではなく、こうした清廉潔白な武人が奸計に陥れられ、そこから這い出すという物語も実は当時数多くあり、正しいものがその能力を正当に評価されて最終的には出世していく、あるいは種々の妨害を排していくという過程も庶民の喝采を浴びたことであろう。その意味では林冲の伏線をこの王進のエピソードは果たしている。それにしても、林冲の悲劇的な物語は、魯智深のあっけらかんとした、いささか異端な痛快談や身内の復讐を見事果たす武松の正統派の任侠譚とは正反対の趣で、その内容はすさまじいばかりである。それは暗く悲惨な物語である。林冲は何度も命の瀬戸際に立たされるが、その度に危ういところで難を逃れ、危機を脱する。その手助けをするのが、魯智深である。こうして両者は繋がることになる。陰と陽の結びつきである。この両者のエピソードに相当のスペースが取られているが、これが『水滸伝』のもともとの中核をなす骨格部分であり、そこからそれ以外のものに広げていったのであろう。したがってまた、これを最初の部分に据えて、読者に強烈な印象を与えたことが、『水滸伝』が成功を収めた極めて大きな要因になったと思われる。

なお、同じように青雲の志に燃えて仕官を求めながら失敗する物語としては、楊志がいる。彼は機会を生かすことができずにいて、だからといって無頼にも走らず、何度でも挑戦を続ける。それは名将楊業の子孫という名門出身の出自がなせる矜持であろうか。これは林冲のように他人の奸計にあって失脚するのではなく、自らの失敗や不運のために出世できないというもので、さらに暗く、悲惨な物語である。通常その手のものは敵役が担う役回りのはずだが、そうとはせずに、名門出身者の苦闘として描いている。なかでも最大の失敗は、皇帝の側近として絶大な権力を握る佞臣の蔡京への誕生祝いの財宝（生辰綱）を都へ運搬する責任者の大役を引き受けるが、それを強奪されてしまうというエピソードである。なお、役人（軍人）がドロップアウトするという形式も結構あって、それらには秦明、呼延灼、関勝、董平、徐寧、索超、朱同、雷横、張青、花榮などがいて、彼らは武術に優れていて、大きくなった梁山泊が官軍と戦う大規模な武力衝突の際の有能な働き手となる。彼らは小規模のゲリラ戦や強奪戦から、比較的大規模な部隊による軍事衝突やさらに大規模な正規軍を交えた戦闘への発展とともに舞台上に登場し、それぞれに重要な役割を担うことになる。

そこで第3に政府の佞臣や権臣の財宝を強奪するという本格的なアウトローの物語が中心にくる。本格的な水滸の物語（『水滸伝』）の開始であり、メインテーマの登場である。これはもちろん犯罪なのだが、奪われる相手が不正な手段によって出世し、巨万の富を築いたものであることから、しばしばこの手のものは、洋の東西を問わず、痛快談として扱われ、犯人側を主

役にしてきた。小説ではピカレスク（悪漢）ものとして、あるいはクライムサスペンスとして、ミステリーの中の重要な部分を構成している。鼠小僧次郎吉やロビン・フッドなどの義賊の物語であったり、難攻不落の地下金庫に忍び込んだり、金持ちの宝石を盗んだり、あるいはだまし取ったりするアルセーヌ・ルパンの物語、また日本では石川五右衛門という大盗賊が秀吉の黄金を狙うという盗賊ものになったりした。しかし『水滸伝』ではこれは極めて大がかりな仕掛けと集団劇として扱われている。その点では雲霧仁左衛門とその配下の盗賊集団の話と似ている。それは現在の銀行強盗や宝石ドロボウの物語にも繋がる、わくわくするようなサスペンスに満ちている。盗む側はリーダーとしての晁蓋、ブレンとしての呉用（作戦担当）と公孫勝（情報活動）、実行部隊の劉唐、阮家三兄弟、そして偵察役の白勝の合計8人である。その仕掛けはこうである。真夏の暑い日盛り、重たい荷物を運ぶ下級役人達は不満たらたらである。休みたい、水分を補給したい。折良く森の日陰に入り、さわやかな風が吹いてくる。おあつらえ向きの場面である。指揮する楊志はこういう所こそ山賊が出没すると見て、急がせて森を抜けようとする。それでなくても失敗ばかりしてきたので、捲土重来を期して、今度だけは絶対に失敗は許されないと固く決意している。頃は良し、旅の商人に変装した一派は息も絶え絶えに日陰に腰を下ろし、休む。そこへ酒瓶を積んだ別の一派が通りかかる。そうすると、休んでいた旅の商人達はその酒瓶を売ってくれとせがむ。これは売約済みで、これから届けに行くところなので駄目だという。少しぐらいいいだろう。駄目、駄賃ははずむから、駄目です、といった押し問答の末、一人が目を盗んでこっそりと柄杓で酒を掬って逃げ出す。それを追いかけていった隙に別の者がさらに酒をさらうといった案配で、結局、あらかた一瓶を吞んでしまう。最後に柄杓を新しい瓶に突っ込んだのをなんとか防いで、蓋をして、酒を運んできた側は立ち去ろうとする。ここまでを見届けた、くだんの荷駄を運んでいた下級役人達は楊志にせがんで、残りの酒を買い受けるよう懇願する。楊志もこれ以上、無碍にはできないし、痺れ薬が入っていないことはすでに旅の商人たちで証明済みなので、よかろうとあって、酒を買って、下級役人達に吞ませて休息を取らせ、ついでに自分もご相伴に与ることにする。しかしその酒には痺れ薬が入っていて、まんまと一杯食わされたのである。そのトリックは、最初は酒には痺れ薬は入っていなかった。その証拠に行商人達は酒を飲んだからである。しかし、柄杓をもって逃げ回った一人がその過程でこっそりと痺れ薬を柄杓の中に入れ、それを酒瓶に突っ込んだところで、戻ってきた酒運搬人がその蓋をした。そのため、そこには痺れ薬が充満していることになる。それと知らずに楊志や下級役人達がみんな吞んだというわけである。これは極めて鮮やかな手口で、おそらく実際にあった話ではないだろうか。このエピソードが前半の中心に座っていて、この物語が単なる個人的な任侠話の積み重ねではない、集団劇であることを物語っている。巧みな作劇術である。そしてここから、梁山泊への集団的な移行と結集の物語が始まる。

かくて、今度は梁山泊での集団的な反抗へと舞台は移る。さて晁蓋達はその後何食わぬ顔を

して村に帰り、ほとぼりが冷めるまでは言動にくれぐれも慎もうということで一旦解散するが、ひよんなことから一味の一人がしょっ引かれ、拷問の末に自白してしまう。捕り手が晁蓋の家
に迫るが、その隊長の朱同と雷横は日頃、晁蓋の世話になっているので、密かに逃がそうとす
る。そこで危機を脱した一味は財宝を持って水滸の山寨に逃げ込むことになる。ここは周囲を
湖沼と森林と山岳という要害険阻な自然の利に恵まれていて、その中心に山寨があり、そこ
に立て籠もって、通りかかる旅人を襲ったり、たまには近くの村々で略奪行為を働くといっ
たけちな山賊行為をしていた連中の巢窟だったが、これにしっかりした理由付けと仲間内のル
ールを確立し、目標を持った集団に変貌させる。そのために、これまでのボス（王倫）を追
い出して、山寨を乗っ取ることになる。その交代劇、一種のクーデタを成功させる上で、す
でに山寨にいた林冲が大いに活躍する。そして山寨を乗っ取り、実力本位の位階性一序
列一を確立する。これは軍事組織的なものだが、そうした序列がこの種の組織の中での秩
序の維持には必要である。まず山寨の中心を「聚義庁」として仲間によって集団的に
自立した意思決定を行う場を設定し、かつ合議に基づいて運営するシステムを確立す
る。各自はそれぞれの役割分担に応じて働き、成果は公平に配分される。財産は集
団のものになり、一種の「共産主義体制」—そういっては大ききなら、共働・共有・共
生の世界—である。そして、強きを挫き弱きを助けるという反抗者の基本ルールを確
立して、周辺の同意と支持を得ようとする。また広く同好の士を募ることになる。さ
らに貧しい人々に恵むという行為もする。その結果、集団は次第に大きくなり、強固
になっていく。したがって、ここから本来なら集団的な反抗劇に入るはずである。そし
て晁蓋はこの集団の事実上の創始者として、大きな度量をもち、リーダーシップを備
えた大人物でもあり、頭領にふさわしい品格を備えている。彼の掲げた「替天行道」（天
に替わって道を行う）は単なる無頼から脱却して、道理と倫理と規律に基づく目的意
識的な追求、つまりは大義を持って進むことを目指すものである。この晁蓋が掲げ
た方向へ進むのであれば、それは世直し、抵抗者としては真っ当な方向であった。と
ころが、『水滸伝』は必ずしもそうはならず、寄り道をして、表向きの主人公である
宋江を登場させ、それに絡まるエピソードが続くことになる。

この宋江がどうにもよくわからない人物である。というよりも、彼を登場させたこと
によって、『水滸伝』は本来の性格を脱し、おかしな方向へと向かうことになる。し
きりに宋江を義に厚い大人物として描き出そうとしているが、物語の展開を見る限
り、どうもそうは見えない。その理由は、確かに宋江が実際に存在した人物なので、
ストーリーを勝手に変えられないという事情もあっただろう。しかし、その役回りを
考えると、むしろ『水滸伝』の基本的な結社の本筋をねじ曲げ、間違った方向へ
と導いた張本人のように思えてならない。個人的には何の取り柄もない、地方の
下級役人なのだが、世話好きで、交際範囲が広く、知り合いが多いこと、また人
助けをしたり、施しをしたり、義理堅く、しかも親孝行などの側面も濃密にもつ
ている。しかしこれらはとりたてて際立ったものではない。むしろ、私が考えるのは
その反対で、彼は

『水滸伝』を間違った方向へと巡回させるための極めて狡猾な術策と戦略をもってこの集団に参入してきた裏切り者、内部破壊者—そういつて悪ければ、自らの「招安」路線に導くことを目指したたかな人物—であったのではないのか。その最大の汚点は「聚義庁」を「忠義堂」とかえ、反抗から帰順—「招安」—へとその基本路線を転換させた、本来の主旨から逸脱する、いわば「犯罪的」ともいうべき役割である。反抗が強まるのは支配が悪いからだが、その原因は、天子は無謬であるから、側にあるものが悪い、つまり「君側の奸にあり」とするのは、中国において王朝が交代する際によく取られた手法である。またわが国でも勸善懲悪もの—たとえば、「水戸黄門」や吉宗を主人公にした「暴れん坊将軍」など—が好んで設定するシチュエーション（状況設定）でもある。また実際のアウトロー組織が崩壊するのは、内部の裏切り者—内通者—が政府側に寝返って通報する—一手引きする—形のものが多い。宋江もまた同じ轍を踏もうとしている。そして皇帝に帰順し、役職をもらい、忠誠心を発揮する舞台としては、もっとも苛酷な外敵侵入の最前線に派遣されて、しかも健闘むなしくあらかたが戦死するという悲劇的な終わり方をする。これは宋江の帰順路線の破綻以外のなにものでもない。

では反抗から帰順へという宋江の基本戦略は、どのようにして『水滸伝』の中で成功を収めたのだろうか。まずその広い交際の中で人脈を打ち立て、その仲間内で、任侠の士、人徳者であるという評判を打ち立てる。これがどう打ち立てられたかは『水滸伝』では語られていない。ともかく人徳者—そのため、「及時雨」と呼ばれる—なのである。だからといって、決して無欲の人ではなかったことは、酒に酔って、日頃の鬱積した気持ちを壁に書いてしまい、それを証拠にして、悪女に脅され、殺してしまうという一節もある。表には出さないようになってきたが、野心家なのである。次に山寨にも知己を得ながら、役人も続けるという二股膏薬を張り続けることになるが、それは現在の地位と立場にも未練があり、そのまま出世していくことも捨てきれないからである。だがこのことは梁山泊に危機をもたらすことになり、またそのために宋江が窮地に陥ると、梁山泊側はその助けに向かわざるを得なくなる。こうした効果を宋江は十分に見計らっていて、どの時点で山寨に参加するか—あるいは役人としての出世街道を断念するか—を密かに計算していく。そして正式メンバーに成る前から、山寨のメンバーになっている自分の腹心を使って、情報を引き出し、メンバーの自分への忠誠度を測りながら、時節の到来を待つ。第3にこの宋江の腹心達だが、情報（諜報）担当者の戴宗、テロリスト—肅清実行者—の李逵を左右において絶対的な信頼と力を築き、晁蓋亡き後の後任のボスの座に呉用等の力を借りて見事就く。その前から宋江は副頭領だったのだが、晁蓋の不慮の死後、頭領は一人だけでは駄目なのでもう一人の頭領として、都の大旦那の盧俊義を担ぎ出し—その仲介を担ったのが燕青—しかも、晁蓋の弔い合戦に成果を上げた方を頭領にすると決めていながら、その勝利に貢献した盧俊義ではなく、自らが頭領に就いてしまう。この厚かましさである。それは山寨内にはそれに強く反対するものがすでにいないほどに、宋江の影響力と支配力が強

かったからである。呉用は変節して宋江についた一不思議なのは、いつも頭領に従って、軍師の役割を果たしていた呉用が、晁蓋が総大将になって出陣した曾頭市での戦いには何故か参加せず、そのため有効な作戦を取りえなかった晁蓋が戦死する一わけだが、それは同時に公孫勝を閑職に追いやることでもあった。両者の路線の違いが明確になった結果である。その結果、公孫勝は事実上、途中から抜けてしまう。もう一人の忠臣は花榮である。彼は何度も宋江の命を救い、そしてこの純情無垢な忠誠心の厚い人物をすっかり取り込んで、宋江推戴の筆頭者に立たせる。そのために、宋江と花榮は武勇に優れた秦明を陣営内に引き込むために、陰険な陰謀を企み、秦明が官職を投げさざるを得ないように仕向ける。その陰謀によって妻を殺された秦明は梁山泊に加わるが、その埋め合わせに花榮の妹と再婚して、両者は姻戚関係になる。いずれにせよ、秦明をはじめ武勇に優れた面々はどういうわけか、みんな「単細胞」的な好人物—お人好し—が多く、宋江の狡猾な術策に簡単にだまされてしまう。老練で巧妙な宋江にすれば、彼らを手なずけることなど、赤子の手を捻るぐらい容易いことだろう。なお呉用と花榮の二人は宋江の帰順路線が失敗し、宋江が死んだ後、その墓前で一緒に死ぬことになる。そうせざる得ない負い目を仲間にかけていたからであろう。また宋江を頭領にするために担ぎ出された盧俊義は毒を盛られたあげく、水死させられる。これもよくわからない人物で、『水滸伝』の最終盤で突如登場し、宋江に優るとも劣らぬ大人物で、かつ武勇にも優れているという触れ込みだが、実態は宋江の帰順路線のお膳立てをするために密かに呼び寄せられた人物か、あるいは燕青によってその方向に利用された、お目出度い「お大尽」だったかの、いずれかであろう。宋江も同様に毒を盛られ、死期が近いことを悟って、李逵を道連れにして、彼に毒を盛って死なす。汚いことをいやというほどやらされたこの男が、自分の死後、到底生き延びられないことを宋江は知っていたからである。

ところで、宋江の帰順路線が成功するためには、都での皇帝側との密かな交渉が大事になる。それを担ったのは、主に燕青である。彼が盧俊義を見つけてくる。色白の遊び人、燕青と、色黒の粗暴な野人、李逵は表裏一体をなしているが、二人とも、宋江路線を支えた極めて重要な人物である。そして両者は、宋江が権力の頂点に登り詰める段階でのテロリスト、肅清者としての李逵の果たした役割が、帰順路線に転換した後での交渉役としての燕青へと中心軸が移動することになって、攻守所を変えることになる。そのため、面白くない李逵は朝廷側の交渉相手を殺そうとするが、燕青に阻まれ、投げ飛ばされてしまうというエピソードもある。主役の明らかな交代である。しかしその最後は違っている。李逵はさすがにあまりに多くの人を闇に葬り、殺してきたので、生かし続けることができないと考え、宋江が道連れにする。燕青のほうは仕事としてやったのであって、個人的な忠誠心はないとばかり、行方知れずになる。あるいはまごまごしていると仲間には殺されると恐れて、素早く身を隠したのかも知れない。同じことは戴宗—どこか毛沢東の腹心の康生に似ているが—もそうである。この男も、情報通らしく

正確な情報を先に知って、先行きが危ういことを察知して、次第に宋江から離れて、どっかに去っていく。そして死を免れる（あるいは燕青ともども、闇に葬られたのかも知れない）。百八人のうち、あらかじめ対遼戦争や方臘の乱の最前線に駆り出され、討ち死にしていくことになる一残ったのは36人だが、凱旋途中で抜けたものがさらに9人いて、都に戻ったのは27人しかいなかったが、はじめから醒めていた連中や幸運にも死を免れた連中はまた新しい働き場所を求めて、たとえば李俊や童威は南方へ船出し、柴進や李応はもともとが資産家だったので、郷里で悠々自適の生活を送ることになる。また宋江の帰順路線に強硬に反対した阮小七は、兄の二人が戦死した後も生き残る。なお宋江の「招安」に明確に反対したのは、魯智深、武松、李逵などだが、そのなかでも特に魯智深と武松の最後は任侠らしい終わり方をしていて、討ち死はしていない。武松は左腕を失う大怪我をするが、生きながらえて80才の大往生を遂げる。魯智深は寺に戻って、座したまま往生を遂げる。林冲は中風にかかり、武松に看病されて世を去る。これらの任侠の士は天寿を全うすることになる。節を曲げない立派な死に際である。

このような『水滸伝』解釈は実は私だけではない。似たようなものがいくつかが散見される。しかし圧倒的多数は『水滸伝』を義利と人情の物語として理解し、その麗しい同志愛と悲劇性をこれでもかとばかり盛り上げることになる。その点では洋の東西を問わず、お上に反抗するアウトローは最後には悲劇的な死でもって終わらざるを得ないという宿命を持っているようである。そうしないと、秩序は保てないからである。ロビン・フッドしかり、国定忠治しかり、ジェシー・ジェームズやエミリオ・サパタしかりである。そして『水滸伝』もまたしかりである。さて、私がここで展開したいのは、何故そうならざるを得ないのか、そしてそうなることによって、これらの物語は大衆の深層心理にどのように入り込み、どのような役割を秩序維持の上で果たし、そして大衆への世論操作を担っているかを考察することである。次にそのことを考えてみたいところだが、その前に、この種の反抗運動全体の中に位置づけて、これをさらに深めてみたい。

(三)

著名な歴史家エリック・ホブズボームには『匪賊の社会史』(Bandits)という大変興味深い研究書がある。彼は匪賊や義賊の物語や伝説や逸話を主に西洋の歴史の中から発掘して、これを体系的かつ論理的に分析、展開しているが、その中に『水滸伝』(All Men Are Brothers, パール・バックによる英訳本のタイトル名)についても言及していて、重要なものだと指摘している。彼は農村匪賊の誕生を近代以前の農村社会から解き明かしているが、そこでの、体制に縛られない自由な人間の出現は、第1の源泉としては農村過剰人口の存在、第2にその農村社会

に同化できないで、無法状態に追いやられた、限界状態の人間にあると考える。しかもこれらは集団的な存在として滞留していて、それらが「不正な行為や迫害に直面したとき、力や社会的優位に対して従順に屈服することなく、レジスタンスと法の無視という道を歩む」¹⁾ことになる。これが匪賊の出自である。それ以外に「強盗貴族」(robber baron)と犯罪者をあげ、それらがしばしば農民匪賊と混同されているが、相対的には別物であるとして、両者を分けている。零落した地方の地主がごろつきの大きな供給源となったり、都市的ないしは浮浪的要素の犯罪的な地下社会が伝統的な社会のアウトサイダー(外部者)として、非体制的ないしは反体制的な人間を構成することはよくあるところだが、これらが無秩序状態や戦争などの時期には元兵士、逃亡者、略奪者といった農民層からの非自発的賤民として溢れだし、一方での農村匪賊(義賊)と他方での反義賊とにそれぞれ合流して行って、両者の接着剤の役割をはたすようになる。そして両者はクロスすることになる²⁾。そして義賊団は①貴族強盗(noble robber)(たとえば、ロビン・フッド)、②ハイドウク(haiduk)と呼ばれる原初的なレジスタンス戦闘者かゲリラ部隊、③テロをふるう復讐者(avenger)から成ると述べている。私はメキシコでのパンチョ・ビラやエミリオ・サパタなどの農民反乱の主導者になった無法者や、銀行強盗や列車強盗を重ねるアメリカ西部のジェシーとフランクのジェームズ兄弟のことを映画で見て知っている。またイタリアのマフィアに繋がるシチリアのサルバトーレ・ジュリアーノの謎に満ちた物語も映画で見た。これらも皆、この本の中で取り上げられている。

いずれにせよ、これは極めて本格的な匪賊研究であって、それ自体検討に値するほどの興味津々たるものだが、ここではこれ以上に深入りせず、その是非について論じるつもりはない。機会があれば、別途論じて見たいものである。ここではこのホブズボームの分析を背景において、『水滸伝』について、前節での私の論説を少し深めてみよう。もっともホブズボームは社会変革運動の担い手として彼らを考えているわけではなく、社会の反抗者、社会の歪みに巣くうものたちの一部として考えている。したがって、彼らがそのまま社会変革者になるわけではない。とはいえ、それらは無関係なわけでもなく、そこには両者を繋ぐ細い通路があるし、同時にそれがまがい物として、革命家、社会変革者を装って、そこにつけ込み、紛れ込んでくる可能性もある。その両面を持っている。ただし大事な原則は、革命運動の先覚者たち—たとえば、ロシアや中国などでの—が見ていたように、あらかじめ出自によって分水嶺を引かないことである。ロシア映画に「チャパーエフ」というのがあり、そこでは農村の無法者から、革命戦士に変貌していくゲリラ指導者の生き様が活劇風に描かれている。このように事態はダイナミックなものであり、一定の条件の下では相互に転化し合う可能性がある。だから、これには無前提で臨むことが取るべき原則になる。

そこで『水滸伝』に戻るが、まず第1は、私は宋江の帰順路線を強く非難したが、革命集団でない彼らに実際にはどんな選択肢が現実により得たのだろうかという疑問が湧く。単なる強

盗団ではなく、そこにはそれなりの大義と集団的な秩序と組織原則が立てられたにせよ、所詮は抵抗者、反抗者、アウトローに過ぎない。国家を転覆させるといった最終目標を持たないのであれば、いずれは国家権力によって掃討され、解体されてしまうのは目に見えている。あるいは腐敗し、内応者を抱え、内部崩壊する危険もたえず孕んでいる。そうだとすれば、力のあるうちに交渉によって一定の身分保障を求め、体制内へと戻っていかうとするのは自然の理であろう。そう考えると、宋江の帰順路線は、視野が狭いとはいえ、現実路線の一つであり、ある意味ではしたたかな生き残り戦略だとみられないわけでもない。その意味では一定の道理とバランス感覚を持っているといえよう。だから晁蓋の掲げた「替天行道」のスローガンと宋江の招安路線とをまったく異質で対極的なものとみることにはできないのであって、両者は情況次第で重なり合うことも、あるいは別の方向に行く可能性も、いずれも考えられうる。ただし宋江はそれが反体制から政権打倒へといかないように絶えず気をつけていた。政府軍との局地的な戦いに勝利した後、舞い上がった李逵が政権打倒を口走ると、宋江が厳しく窘めている一節がある。

第2は宋江の頭領としての力量である。彼が自らの暴力を誇示せず—その反対に個人的には極めて力のない人間だった—集団的な組織力を利用して、それを成し遂げていったことである。これは極めて賢明な手段—頭脳プレー—であったといえよう。そうすると、彼には優れた組織力、先見性、戦略眼、そしてリーダーシップとカリスマ性、さらには緻密な状況分析と的確な戦術設定があり、なによりも適材適所に手下を配置し、使いこなす術(すべ)が備わっていたことになる。こうした彼のボスとしての力量は確かである。それを認めたからこそ、手下はついて行ったのであり、誰もそれにとって代わろうとはしていない。晁蓋の死—呉用の不自然な不参加をみると、これも宋江によって巧妙に仕組まれたものだとみられないわけでもないが—という幸運にも恵まれ、当然のように頭領の地位に就いている。その点での彼の評判は仲間内では抜きん出ている。だからそのことを考えると、呉用が晁蓋から宋江へ乗り換えたのは、宋江に「将に将たる器量」を見つけた賢明な選択だったといえなくもない。

第3に、とはいえ、その組織の維持はテロ(暴力)とスパイ(諜報)活動にもっぱら依拠していた。個人の秘密を握り、くまなく情報網を整備し、反対派をあるときはなだめ、買収し、またあるときは暗殺や暴力といったテロの恐怖で脅しつけて、黙らせるか、あるいは従わせるといった方法を駆使した。恐怖を基礎にした飴と鞭の使い分けである。これは閉じられた秘密結社ないしは半秘密組織の中での個人独裁に多く使われてきた方法であり、ヒトラーやスターリンのみならず、世界のあちこちで独裁者がよく取る手法—たとえば、最近のリビアのカダフィなど—を想起させる。秘密警察と監視と密告とデマゴギー(情報の管理・統制・誘導)による支配である。ロシアのプーチンも旧ソ連時代の秘密警察・諜報機関—KGB—の出身者である。その点ではアメリカとて例外ではない。ニクソン時代にウォーターゲート事件として噴出した

が、体制的にも FBI, CIA, NSA などの機関を通じて、最近の「情報通信革命」—コンピュータ、衛星通信、微細な監視カメラ、高感度の盗聴器など—という技術手段の革新によって、人々の私生活の隅々まで監視できるシステムが近年大いに発展した。その結果、「テロとの戦い」という名目を掲げて「愛国者法」によって法的権限を与えられ、一人一人の国民への監視は仕事や余暇や生活の隅々にまで及んでいる。しかもアメリカは単に監視するばかりでなく、「テロリスト」なるものを世界中で追いかけて、どこでも裁判なしにただちに射殺、処刑することまでおこなっている。まさに「ターミネーター」（処刑人）である。その意味では現代における最大の「テロ国家」はアメリカだという、イスラム側の言い分もあながち的外れではない。さらに機密情報の漏洩が進んだことにたいして、これに蓋をするばかりでなく、「サイバーテロ」を新たな攻撃目標として掲げ、その駆逐を国家戦略にまで最近を高めている。

また支配者、指導者の変身もよくあるところである。中国においても政権奪取の過程ではおろか、懐の深い仁君を演じてきた者が、一度皇帝に成り上がると、とたんに暴君に変貌するといったことは、秦の始皇帝から始まり、漢の劉邦（高祖）や明の朱元璋（洪武帝）、そして近くは毛沢東の後半生から晩年までの血なまぐさい粛清劇によく現れているところである。ただしこれらは強固なものであっても、組織全体を開かれたものにするのができず、もっぱら内向きであり、その結果、自ずと先細り傾向を持つ。そのため支配はますます少数のものになり、場合によっては家族までも信用できず、疑心暗鬼に駆られて最後には己一人のみになってしまうことすらある。したがって、宋江の場合、行き着く先は朝廷側との秘密交渉による帰順路線へと自ずと帰着せざるを得なくなる。

第4に帰順した後、忠誠心の証しを身を以て示すために、国難の最前線で進んで戦い、多くの犠牲は覚悟の上で、成果を上げれば、さらに上昇できる第3幕が待っていると計算したが、その夢は結局潰えてしまった。つまり、反抗—帰順—出世という三幕劇は死を持って閉じられたことになる。それは宋江の路線の限界ないしは見通しの甘さ、つまりは戦略の失敗だろうか。「一将功成って、万骨枯れる」というたとえがあるが、結果的には自らの出世と栄達のために、仲間を犠牲にしたことになる。その結果、仲間はばらばらになり、組織は壊滅した。その壮図は灰燼に帰したわけである。その責任を宋江はどう考えたのだろうか。毒を飲まされて死んだということになっているが、絶望の果てに自らそうしたのかも知れない。いずれにせよ、その行き着く先は目に見えている。破綻して、自滅していかざるを得ないのである。そう考えると、宋江の乗っ取りと帰順の路線は失敗だったと断ぜざるを得ない。あるいは権力側はもともとの招安の意図をそうしたものとして考えていて、いつか消滅させるという深謀遠慮の上に立って、交渉に臨んだのかも知れない。そこに両者の思惑の違いが厳としてあった。洋の東西を問わず、こうしたストーリーはよくあることである。そう考えると、権力側の方が一枚上手で、イニシアチブを握っていたといえよう。だから、反対者を抱き込むという複雑な過程は取ったものの、

所詮は権力の補完物の役割を宋江は担わされた結論づけざるを得ないだろう。

以上『水滸伝』で描かれた宋江の戦いとその顛末についての評価を下したが、問題はこれが美談として語られ、大衆のため息と涙を誘い、「義の物語」として語り伝えられてきたその強みと意味に関してである。そのイデオロギー操作に関して次に考察するのが順序だが、その前に、反体制運動という、より広い土俵の中で、もう一段深めて、宋江の役割とその意図と、そして生み出した結果について考えてみよう。

(四)

前節では『水滸伝』そのものについて、そこで描かれている宋江の言動に関して私なりの解釈と評価を下したが、ここでは『水滸伝』そのものから少し離れるが、一般的に時の体制に反抗し、異を唱える反体制運動という、より広い土俵の中に広げてこれを考えてみよう。一般に抵抗運動なり反体制運動なりを掲げる集団的な運動には、1. 大義、2. 運動、3. 組織の三つが必要不可欠な要素である。そこでこれらに関して、順次考察してみよう。

第1に現状への耐え難い不満や苛酷な支配にたいして抵抗と反抗が始まるので、まず自然発生的な運動がくるが、そのためには掲げるべき旗印、仲間を集めるための大義、あるいは政治活動にまで発展した場合には、達成すべき綱領などが必要になるし、事実、必ずそれらは作られている。そうしないと、単なる烏合の衆の突発的で自暴自棄的な反抗に過ぎなくなってしましうし、他の同業・同種集団との違いが明確にならず、人を集めることもできない。そこでは現体制に何故反抗するのか、現体制とどこが違うのか、そして何を指すのかといった、現体制との決定的な違いを際立たせることがまずもって大事になる。その際には強烈なインパクトを与えるため、多少極端になってでも明確な主張とメッセージが唱えられる。そして誰もが納得できる論理と、同調・賛成できる根拠、そして仲間内での一体感が生まれ育っていく結束(同志愛)の仕方が、しかも平易でわかりやすい言葉で語られる—つまりはスローガン化すること—が多数の支持を得るための極意となる。そして綱領になれば、公的な約束であるとともに、自らをも律する基準になり、責任と使命と倫理が必要になる。もっともそれらを全て包摂して一般化すると、多少曖昧なものを含まざるを得ない。あるいは最大公約数的なものになるため、多少一般的で抽象的になることもある。こうしたことから、多くは路線論争としてその後内部に深刻な対立、抗争を生むこともある。またそれは運動の進展と状況の変化に従って、それ自体が変化するようにもなる。したがって、そうした変化にも応じられるだけの一般性、普遍性、そして柔軟性をもって、発展的で拡大的な傾向をもつことがその集団の可能性を高めることになる。ただしそれは同時に曖昧さと変節の可能性を多少残していることにもなる。晁蓋の掲げた「替天行道」は、それによって多くの同調者を惹きつけると同時に、多少曖昧さを残し

たスローガンでもあった。したがって、組織の拡大と運動の進展に伴って、宋江流の招安路線に変更する余地が少なからずあったといえよう。またそうしないと、多くの仲間を惹きつけることができないし、そしてそれを取りまとめるのが、頭領としてのリーダーシップ（指導力）の発揮でもある。その点では集団としての組織力もさることながら、リーダー個人の個性や先導性や判断力など、集団を束ねる力と頭脳と感性（ハート）、あるいはこれら全てをまとめたカリスマ性が集団の発展に大いに与っている。その点では晁蓋は申す分のない人徳者（ボス）であったが、組織者としての力量は宋江が抜きん出ているともいえる。創始者と継承者との役割の違いである。もっともそれらを全て一身に兼ね備えた人物は希有であろう。

第2に多くの反抗運動は支配体制の対極での分散的な運動として始まるし、またできるだけ支配から遠い所に位置していないと、強固な中核を作り上げ得ない。基礎固めのための時間が必要になるからである。だから、大抵は支配側側がそれについて気がつかない内に大きくなることが多い。つまりその間に大いに力を蓄え、組織を強固にすることが肝要だということである。ただしこれを支配側からみれば、そうした分散的な反対・反抗運動に絶えず目を光らせておく－場合によってはスパイを送り込む－必要があるということになる。またこうした感性を持たない支配者は凡庸だということにもなる。だがそれが成長し、無視できない程のものになり、掃討を試みるようになると、ゲリラ戦や、その次のかなり規模の大きな遭遇戦を経験するようになるが、ここで生き残ることができるかどうかの一つの転機になる。多くはここで一掃されてしまう。宋江は小規模の集団の結成と拡大から、かなり大規模な抵抗力をつけるまでに成長する過程を極めて慎重、かつ繊細に観察して、ことに臨んでいる。段階を追って試練を与え、それを克服して、一步一步前進していくことを辛抱強くおこなっている。ここではなによりも成功と勝利が最大の妙薬になる。だから、勝利を積み重ね、それを鼓舞することを特に強調している。このようにして、組織構成員に自信を持たせることである。そしてこの過程では自らは組織の内部に入らず、側面から客観的に見ている。生き残れるかどうか－その主体的力量と客観的条件－をつぶさに観察している。そしてこれが成功し、十分に政府軍と戦えるようになったと判断されたときに、組織の内部に正式に入って行く。そして内外にその力を誇示していくようになる。この宋江の現実的で段階的で用心深い戦略が功を奏した形となった。その意味で言えば、大した戦略家であり、また堅実な組織者でもあり、そして沈着・伶俐な分析家でもある。こうしたことは、後の毛沢東の持久戦論や遊撃戦論にも多大のヒントを与え、またそれはその後のベトナムでのホー・チ・ミンやポー・グエン・ザップのゲリラ戦に集大成されていったもので、多くの教訓を与えている。

この過程を経て、その次には同種の集団を包含して大きくなって、有力な勢力として盤踞できるようにまで成長するが、これがさらに有力な勢力から決定的な存在にまでなっていくためには、そこに一大転換が必要になる。それは支配層の内部に同調者を見つけ出し、支配の内部

を攪乱し、そして転覆させていくことである。そしてこの同調者たちが運動に合流してくるメカニズムとその呼び水・受け皿作りがここでは極めて重要な課題になる。彼らは支配の内側において、日頃からその腐敗振りや弱点をよく知っている。こうした連中が内部の出世競争や権力闘争に敗れたり、あるいは昇進や台頭を阻害されたり、そして腐敗振りに嫌気がさしてそこから抜けようとしたりして、政権打倒を叫び出す—「君側の奸を除く」—ことに転換することによって、これは一大運動になっていく。彼らには強いものに加担し、絶えず中心にいたいという願望と性向があり、それを巧みに利用することが反体制側には大事となる。つまり、反乱の勃発による政治的な危機が体制内の亀裂を生み、内部崩壊へと進むことになって、一段と政府の危機、そして体制の危機を生むことに繋がるからである。その結果、力のバランスを変えることになる。その場合、これらは内部事情に通暁しているという利点と、同調者を得られやすいというメリット、そしてまた受け皿を用意しやすいという効果を持つが、他方では体制内に吸収されてしまいかねない弱点や、腰砕けになってしまう不徹底さという弱さ、そしてそのことをめぐる内部分裂の危険をも合わせ持っている。というのは、反体制側と体制内の内応者との間の駆け引きが続いて、その帰趨がどちらに傾くかは一義的には決められないからである。そこではなによりも政治的交渉力が物をいう。だからこれは危うい分岐点でもある。その結果、目標を誤ると、体制の変革、つまりは革命ではなしに、単なる政権交代に終わることになり、実際にはそうしたことが多いため、それを支持した民衆が次第に離反していくことにもなる。中国では農民反乱が直接に政権打倒に成功することは滅多になく、多くは陳勝、呉広（秦末）、黄巢（唐末）、李自成（明末）などのように今一步のところで頓挫し、支配層の内部からの離反者によってその成果—漁夫の利—がかすめ取られるのが常だった。したがってそれでは所詮は同じコップの中の嵐、同じ土俵上での単なる首の据え換えによる移動にすぎなくなってしまふ。民衆は大いなる失望と挫折感を味わうばかりである。

一方、混乱と異質物が混入することを恐れるあまり、そうしたものから離れた、対極での反体制運動だけに終始して、純粋性と孤立性を誇示し続けると、革命はおろか、政権交代にも到底届かないことになりかねない。現実政治は哲学や倫理やその他の純粋理論の領域ではなく、また宗教運動やイデオロギー闘争のように純粋性や一貫性を競うものでもない。雑多で不純なものを多く含む、総合的かつダイナミックな過程である。当然に一定の政治的な妥協や、場合によっては後退や、その反対の飛躍にも見舞われる。したがってそこでの舵取りには優れて包括的・大局的で多面的で多重的な才能や判断力が求められる。それは個人では到底担いきれないものだからこそ、それらを有機的に結合させた組織の持つ力が必要になる。組織こそがその瞳となり、頭脳となり、そして手足とならなければならない。そういう意味では一般に革命と称されているものにはかなりの幅があり、多義的（アンビバレント）な解釈を呼ぶ要素が多くある。ただし唯一の共通性は権力を奪取することである。そして革命は少数（直接民主制）

が多数（代議制民主制）に優る絶好のチャンスをとらえることであり、それに向けて全智全能を傾けることである³⁾。その運動はなによりも現実直視から生まれる。こう見てくると、この両者をどう結合させるかがポイントとなる。その際、単なる政権交代にならずに体制の変革に繋げるには、しっかりとした立脚点を決めることで、そのためには、個人ではなく、その集団の持つ志向性（集団的意志）、階級的立脚点、そしてその究極目標、つまりは明確な綱領を持つことであり、それに照らして判断することである。そのためになによりも大事なものは、一旦は支配を打破するための階級的な立脚点（階級的立場）を明確にし、その立場に自らをおくことである。それは出自を表すものではないし、また自らの現在の階級を示すものでもない。実現しようとしていることの客観的な意義を明らかにするために、その階級的な土台をしっかりと見据えることである。これがないと、運動は状況次第で右往左往するだけの、頼りない浮遊物になってしまう。

またこの運動では様々な個人的な運動の集約点として、集団的な運動の持つ決定的な役割が重要になる。というのは、個人よりも集団のほうが遙かにパワフルだからであり、国家という強固な権力に立ち向かうには、一にも二にも強力な組織力が求められるからである。だから集団が単なる数だけをあてにする烏合の衆にならず、集合された強固なものになるためには、組織的な運動が必要になる。それは各自の力を組み合わせ、活用し、有機的に働かせるための手立てである。集団が組織的に動いていくためには、それ独自の法則を熟知することが求められる。そして戦略と戦術を立て、組織を効果的に動かしていくには、規律とリーダーシップ（指導部）、そして訓練と学習が求められる。そして運動には敵の明確化とその弱点の分析が不可欠になる。そこで社会科学—政治学、経済学、社会心理学などが登場することになる。現状の正確な分析が必要になり、そのためには生きた情報の収集が不可欠になる。しかもその力を組織全員が認識し、共有することが肝要である。運動はダイナミックなものであり、そこでは現実が絶えず動いていく。そうした動きに敏感に反応し、柔軟に対処できる柔軟性が組織全体に求められる。経験を積み、熟練し、優れた運動の理論を作り上げ、行使できるようにすること、つまりは運動の習熟化と練達化に努め、より高度の段階に到達することがなによりも大事である。

第3に組織の問題だが、ここでは個人と組織の関係が必ず出てくる。個人が組織に従うということが守られないことになりがち—そのため、内部粛清が強まる—だし、また組織を利用して、その中で個人的な野心を実現しようとする不心得な「野心家」も出てくる。それをチェックするシステムを組織自体がどう持つかが大事となる。土地所有に基礎をおく伝統的な社会では多かれ少なかれ身分制のしごらみがあり、個人は人格的に独立していないので、その外側にいるアウトサーダーたちが体制変革に当たっての大きな社会的力となり得た。しかし彼らには同時に個人的な反抗や無差別な暴力に頼り、組織力を発揮できない弱点があった。一方、ブル

ジョア社会は個人の人格的な独立を基礎に個人の自由を発揚させ、私有財産制を強調したが、同時に他方では、資本主義のシステムは組織なしでは有効に作動しない。企業は組織を必要とするが、それは指揮者たる企業家によって支配されているために、彼らの私的利益を優先し、その意図を強いることになる。そこでは命令に忠実に従う官僚組織が必要になり、ヒエラルキー的な上意下達の組織体系が作り上げられる。労働者は協業と分業の持つ意味を実際の労働現場で学ぶが、それが資本主義的強制の下にあるため、歪んだ形になる。それを本来の持つ意味で作りに変えることが現代社会では大きな使命となる。そこではまずなによりも世界観の転換が求められる。またそれには個人の権利、自由の保障、民主主義的運営等が求められる。それらを自らの骨肉とすることが陶冶の意味である。さらに組織内での多数派形成努力（ヘゲモニーの確立）は運動の成功のためには不可欠である。それをめぐる真剣で実りある闘争なくしては、運動は進まないし、成功も覚束ない。運動を正しく、的確に、そしてダイナミックに展開し、かつ成功に導いていくためには、科学的法則性と人間心理に長けていなければならない。そのためには、保障された土俵の下での真剣な討論による戦略・戦術の確立が運動を発展させるためには不可欠で、また組織はそれを通じて発展していかなければ成功は覚束ない。個人の創意工夫を大切に、かつ集団的な検討と合意形成を経て確実に実行していく気風、そこでは対等平等な個人の権利の保障、民主主義の発揚、民主主義的なルールに基づく決定と素早い実行などの組織原則が守られていくことが大事になる。場合によっては指導部の交代も必要になる。

しかし、運動が発展して組織が巨大になると、それが何重、何層にも成ることから、素早い実行と適切な判断のために次第に指導部の優位性が確立されるが、その結果、不透明になり、上意下達式の階層上の命令系統だけが幅をきかせることにもなりかねない。官僚主義の弊害である。それは特定の派閥の形成となって、やがては個人崇拜にまで高まっていく。そうしたことが組織嫌いになり、分散的な個人がばらばらにされ、その結果、支配層の思うつぼに嵌ってしまう。そうならないためには、集団的意志の形成がなによりも大事なことで、そのためには組織が必要なことで、そこでは組織が有効に作動するための民主的諸権利が保障されていること、個人の創意が最大限に発揮されること、仲間同志の友愛（同志愛）が形作られるようになること、それらが求められる。もっともこれらが保障されていても、個人的な野心家がつけいる隙がなくなるわけではない。しかもその個人がリーダーだった場合には、最悪である。彼らには優れた個人的資質があり、それを悪用すれば、集団自体を間違った方向に導くことは比較的容易いからである。宋江の事例はそのことを如実に示している。したがってそれを阻止し、チェックする機能と、そうした濫用を許さない気風を組織自体が内部にもつことがなによりも大事になる。それは民主主義の発展であり、成熟化であり、そしてまた組織活動への参加者の自立性の確立と習熟の達成でもある。「自己決定と他者同意」という古くて新しい、民主主義の教訓がその中心に確固として座ることが、あらゆる社会と組織において大事であり、人々はそこに

向かって長い長い旅路を歩き続けて来たし、今後も歩き続けるだろう。民主主義の破壊にはさらに強固な民主主義の構築によってしか、克服することはできない。それは被支配者側、人民の側の貴重な集団的財産である。これを守り育てることである。

(五)

さて最後に『水滸伝』のイデオロギーと大衆操作上の役割であるが、注意しておきたいことは、イデオロギーといった場合、明確な主張や思想を持ったものをイメージするかも知れないが、ここで展開されているものは、必ずしもそういったものではない。むしろイデオロギーと思わせないで、庶民の心の内に自然と浸透して行って、いわば常識として定着していくものである。それは一種の社会常識や定説となって長い間定在し、滞留していく。それは特定の時代に固有のものというよりは、それらを超えて、通史的に貫通している類のものである。したがって、その持つ意味合いと効果は極めて大きく、かつ長期にわたっているので、その克服は容易ではない。目先のイデオロギーを突破しても、その背後に残っているからである。

そこでまず第1に個人的な武勇の発揮を表面に押し出すのが、この種の英雄豪傑譚では常套だが、『水滸伝』はそれに留まらず、集団的、組織的な抵抗をも描いている。個人から集団へという展開はこの手のものでは抜け出ていて、凡百のものよりも一歩前進である。『水滸伝』の魅力はまさにここにある。しかしそうすると、優れた個人と集団との関係はどうあるかが次に問われてくるが、聚議（民主主義）を基本に据えるが、その上で組織内に序列を設けて、位階性と平等性の緩衝材として使う方法がとられている。これは現代の組織では指導部―幹事会や政治局、取締役会、執行部などの呼び名で語られる―と広く呼ばれているものである。そこに権限を集中して、迅速、適切な指導と決定ができるようにする仕掛けである。しかしそれでも解決できずに、個人を組織の上に置き、個人の絶対性を強調することが、個人の創意性や人権を尊重する上で不可欠であり、また民主主義にもかなうといった主張がまかり通りがちである。極端な個人主義の蔓延である。しかし問題を個人の枠の中に止めてしまうと、社会運動にはならず、広がりを持たない。英雄的な個人の反抗に依拠するだけで、集団も庶民もそれを見守り、それに従うだけである。これがこの手のイデオロギー操作の狙い目でもある。社会に不正が横行し、支配が乱れるのは世の常だと認めながら、それを正していく方法は個人的な正義に委ねている。そして組織を破壊し、解体させてしまうことがあっても、個人の利益を尊重するためにはやむを得ないという論調にまで発展するようになる。しかしこれでは組織的な運動は成功しない。組織嫌いの思想を育て上げるだけである。『水滸伝』では集団の利益、目標が掲げられ、そのとおりに展開されながら、あるところまで到達すると、急転直下、特定個人―宋江一の掲げる帰順路線が現れてくる。これは山寨に大激震となり、仲間は右往左往する。し

かもその際にそれを鎮め、多数意見に持っていくのは、宋江の賄(買収、便宜、利益誘導)と鞭(テロの恐怖)の二面戦略の遂行である。ここには当然に深刻な路線闘争が生まれたはずである。しかしこうした深刻で複雑な過程を素通りして、あたかも宋江のリーダーシップと彼への個人的な忠誠心によってこれが難なく実現したかのように『水滸伝』は描いていく。事柄の本質に切り込まず、矛盾と向かい合わずに、きれいな事でも済ませることが、この手のものの常套となる。その点での『水滸伝』の弱点はそれ以外のものと同じレベルである。個人的武勇へのたえざる回帰とそこへの帰属が主要なトーンとして貫かれる。そして本当は仲間内での真剣な討議と行動を経て団結が生まれ、同志愛が育まれるはずなのに、宋江への純粹無垢な忠誠心によってあたかも一挙に同志愛が生まれるかのように、問題を逆立ちして描いている。

第2に上に立つものが悪いのではなく、周りにいるものが無能であり、悪人であるから世が乱れるという「君側の奸」論だが、これは、政権を倒す際にしっかりした根拠と論理を持たずとも、個人的な野心の上に立って自らが政権を篡奪することに専念できる、はなはだ都合のよい理屈として絶えず使われてきた。実は単なる権力争いにすぎず、自らも支配の側の一員としてその片棒を担いでいたはずなのに、こうカムフラージュすることによって、自分自らをその埒外におくことができ、また政権打倒の正当性を主張することになるからである。これははなはだ都合のよい理屈立てであり、したがって使い勝手のよい道具でもある。しかしそれでは、問題は社会にあり、そうした支配を行っている支配層全体とそのシステムに元凶があることを認識させないことになる。これでは永久に政権交代劇の繰り返しに過ぎないことになる。歴史の中に発展を見つけれない伝統的な史観—というよりも一般常識—から決別することは、それが長い間庶民の中に定着・沈殿しているため、容易ではない。そこでは政治は賢いエリートだけが行い、庶民はそれに黙って従うもの—一倦ましむべからず、寄らしむべし—という愚民思想がまだ依然として残存し続けている。ここから脱却していくためには、なによりもその間違いに気づくと同時に、それを正す学習、思考と考察の繰り返し、とりわけ社会科学の勉強が大事になる。つまりしっかりした社会科学的世界観で武装することがその決め手となる。そしてそれに基づいた行動がその気風を鍛えることになる。逆に言えば、そうした社会科学的な視野をもち、学習を重ねて、自分自身でしっかりした判断力を身につかせないように誘導することが、この種の読み物の狙いでもある。そしてこの種の書き手たちはこうした悪習にどっぷりと浸かり、支配者と同じ世界観に縛られている。支配に迎合しないと、自らの評価を上げられないとでも考えているようである。そうした意図せざるイデオロギーに彼らは縛られている。

第3に人間が悪人になるのは、社会環境とそこでの個人の地位と思考に濃厚に関係するのではなく、その個人の持って生まれた—生得的な—資質によるという考えで、問題を人間性—一般や倫理に解消することがよくやられる。その結果、倫理と宗教に流れたり、それらに矮小化されることがしばしば起こる。そこでの比較はもっぱら個人的野心の大きさの違いや人物の器

といった抽象的なものに解消されがちである。そうすると、これらの野心的な個人を永遠に排除することができず、いつも新たな野心家が出てくることになる。これでは社会改革は永遠にできない。社会改革にはそれを自覚した人々による、売名ではない、献身的な努力が必要だからである。その結果、問題は野心家間の野心の度合や性格の違いに帰着することになる。歴史上での人物評価をこうした個人の資質に解消するのでは、永久に歴史的行為の意味を探ることも、それを深めることもできないだろう。

このように、この種の大衆的な物語は組織嫌い、極端な個人主義、野心的な英雄—実は歴史的には悪人にすぎないのだが—の出現を基本にしている。そこに向けて魅力的なストーリーを流し込むから、はらはらどきどきしながら見ているが、終わってみると、特別の教訓は生まれない。変わるのは舞台と登場人物と具体的な展開だけで、出発点と終結点はいつも同じである。こうしたことの繰り返しによって、民衆は支配に慣らされ、悪政に諦めさせられ、抵抗力を失って、慣性のままに漂うことになる。「長いものに巻かれろ」の世界である。こうした効果をこれらの物語は飽きもせず生み出してきた。『水滸伝』とて例外ではない。それがまた国家公認の読み物としてかくも長きにわたって人々の心を捉えてきた精神でもある。しかしそれに満足していてよいのだろうか。

(2011年11月7日脱稿)

注

- 1) エリック・ホブズボーム『匪賊の社会史』船山榮一訳、ちくま学芸文庫、2011年、40頁。
- 2) 同上、47頁。
- 3) その点ではロシアにおいて1917年の2月革命から10月革命にかけてレーニンが書いた「遠方からの手紙」から『国家と革命』に至る13本の論文・著書は、その精髓として多くの教訓を生むとしたスラヴォイ・ジジェクの指摘は、傾聴に価する。そこには権力奪取に至る透徹した、洞察力に溢れた頭脳のみならずと類まれな実力行と勇気がちりばめられているという。詳しくはスラヴォイ・ジジェク『迫り来る革命』長原豊訳、岩波書店、2005年、参照。

(関下 稔、立命館大学特任教授)

SUIKODEN, All Men Are Brothers, and its ideological role

SUIKODEN, All Men Are Brothers, is one of the most popular classical novels in China. It also is very popular in Japan. It is a collection of many stories of personal and group heroes who fought for justice and resistance against vice and wrongful acts in Chinese society. Eric Hobsbawm pointed out in his book *Bandits*, published in 1969, that social bandits are peasant outlaws whom the lord and state regard as criminals, but who remain within peasant society, and are considered by their people as heroes, as champions, avengers, fighters for justice, perhaps even leaders of liberation, and in any case as men to be admired, helped and supported. Social banditry of this kind is one of the most universal social phenomena known to history, and one of the most amazingly uniform. This uniformity is not the consequence of cultural diffusion, but the reflection of similar situations within peasant societies, whether in China, Peru, Sicily, the Ukraine, or Indonesia. In this paper I intend to study social banditry in China and point out several unique views from *SUIKODEN*.

(SEKISHITA, Minoru, Professor, Ritsumeikan University)

